百人女郎品定

西川筆

巻

序

禁庭に百官百寮の座に
わかちあるも。古絵より百敷の大宮
人〻は詠はじめたる。美女に百
の媚あり。貴妃を芍薬の花
に誉しハ。其紀唐土書にありへ。

大液乃芙蓉未央の柳。梨花海
棠の粧へる華は。ほまれ容色か
ざりはなし。我日の本は殊に女の
風情も外ぐにゝまさりて。雲乃上は
さらなりやんごとなききはまでは。おさなぞ
みやびは優なるまじ。紅しろ粉に賤
ぬりきたくなり。紡績をいとなむ民の
家の下司まで。傾国遊女の色を傍
まなび道しれは。何れ粧ど。女職は手業小家
比丘尼。夜発の類まで其の事りなし之。
西川氏が筆削をうけ。古今女中の
絵鏡草となし女事紙粧ぐようら。写
取のそれはあれど。凡百花に准じられ。
まぐさ絵百人女郎と外題をつく。源

詞乃花のにほひもかはらんには世
てりかゞやく新家にたまへ
めし〳〵し給ふ
享保八ッの卯のはるすゑつかた
花乃盛まで

八文字自笑謹序

大和畫師 西川祐信

百人女郎上之巻 目録

○女帝 ○皇后 ○皇女
○内侍 ○典 ○おもと人
○尼御前 ○斎宮 ○おちやう子
○采女 ○女嬬 ○半
○公卿室 ○公卿娘 ○御乳
○女官 ○女中 ○神職室
○神職娘 ○神子 ○同下女
○武家室 ○同娘 ○園御殿

○女俳諧　○女右筆　○舞子　○有徳人の室　○扇屋むすめ　○傀儡　○衣屋　○按摩　○大原柴木売

○女医者　○女工　○町人上﨟室　○町人中﨟室　○紺屋女　○縫物師　○京お練　○白川石売　○百姓女房

○御髪揃　○瞽女　○めのと　○商人妻　○鹿子結　○牙婆　○糸繰　○矢背の黒木売

以上

○女帝

人皇十五代神功皇后を始とし。さりながら即位ハなし給ハで。胎中の御子応神天皇にわたり摂政し給ふ。三十四代推古天皇ハ即位の始なりし。聖徳太子摂政し給ふ。すなハち女帝中比稀也

○后

もろこしハ上下ともに妻といふ。異国にてハ漢
乃高祖より皇后といふ。日本にハ昔のそハ
神功皇后をはじめとし。太子なれ紀まゐめは
中宮といふ。下ざまよりあそびといふ。日本人皇
の始め神武天皇。異国にてハ周の成王より
これをいふ。中宮皇后ともに天子の妻をいふ也

其外ハ采女の例に同じき也

○神子

巫女ハ唐も日本も神をまつる女なり。夫を
祝部といふ。五畿内にてハ倭姫乃継風也

○武家室

夫乃位階によりて。和泉式部周防内侍の
ごとくいはるべし

○大名女

父の官をもちゆ。夫をもつくハ其位階による

○園御前

諸侯ハ勅命によつて嫡妻を制せらるべしよ。妾をもてはべるもあり。木曾義仲の巴山吹を召つかはれしもこれ也。又園の妾をほうが
めかけといひて。園御前ともいふよ

御所。土京堂再興あつてより始く也
嵯峨ハ人皇八十三代土御門院。元久元年より
始しよりおとこ子までも此鍾風なりけり

○尼御前

人皇四十八代称徳天皇を始とす。孝謙帝
乃重祚なり。法基尼と号し奉る。是比丘尼
御前といひならはせり。そのゝち羅余〔?〕の

従二位の尼。遍照心院を建て住まひけるが、是を尼寺といふ。天子の御母御剃髪の女院様宮さまの小路。皆尼御所といふ。今の寺々に御座惣而住まひける所。何れも御所といふ

○内侍

女官の位也。長橋局勾当内侍諸事を伝奏と。従三位に朝臣となり

○典

是は内侍の次なる官也。大かたは公卿の御女也

○おとな

内侍典侍の外役人の女中なり

○釆女

天子の陰膳をとる也。古今かはりつゝきの大君後に楼の位足といふて。何も其かはりなれば。

采女土器とりて。浅香山かげさへ見ゆる山乃
井の。あさくは人をおもふものかはと読て。やがて
諸兄公つきて国の守へことばやはらげまゐり
ける。又天渟中帝の御時。采女君といふもの
まで。猿沢の池に身を投しかば。そのところ
祢ぐらにして采女はうきいの。池のほとりに見るぞ
これまたし縁ありとといへり

○女嬬

めのわらはもろこし周礼の下位にて百人ばかり也。
続日本紀に宝亀三年正月に。信濃国水内郡の
人女嬬となる是はじめとかや

○半

いはきの彼といふものさるものの足ざうところに
はらよ少しへだたり。脚气一年あまりありける

はしめなり。和泉式部らか、本はおほかた竹
かをおかね巾が身さへけはひさろめかべきれ
やよれる。ゆゑのくらよりそうはうたれたる也

○公卿室（くぎやうのしつ）

摂政関白乃妻ハ北の政所といふ。是ハみな
らくてたまへ公卿の妻を北の方といふ也。清
華家乃女官ハ飲食さら〳〵る也。平人ハ後家は。
是よ准じて公卿の妻をもいふかたきる也。
将軍家ハ大名乃列ゆへ同じくいふなり

○公卿女（くぎやうのむすめ）

まへてハ上臈といふ。二位三位乃内侍を上
臈といふなり。すべて公卿の女をさ上
臈といふなり

○神職室（しんしよくのしつ）

社務神主禰宜祝部氏人社人の別あり。
公家にいはゞ地下也。武家にいはゞ長袖なり。
神社は累氏よりの祖神なるによりて祭は
道によりて治むる世には治世にいたりて夢ゆへ。
氏人をして祭らしむ。出家の墓地を守るに
同じ。其妻なるは平人にひとしきなれども伊勢
八幡加茂のごときは天子将軍家へも女紙

女帝（によてい）
皇后（くわうごう）
皇女（くわうぢよ）

内侍(ないし)
典(すけ)
おさへ

供の女中衆
尼御所

おかうご
いつきのみや
命婦
女官

御乳
姫君
女中

采女（うねめ）
女孺

増女気（ちしさ）

神璽の宝
娘（むすめ）
神子（みこ）
下女

武家の室
大名の姫君

お髪揃へ
女雛遊
女いしや

女祐筆
お物師

瞽女（ごぜ）
舞子（まひこ）

中居
こしもと
町人
上﨟の室

有徳人の宝
十種香の砌

町人
中分の妻

むすめ
商人(あきんど)の妻(つま)
下女
たえく

職人女
扇屋
組屋

苧つむぐ

しつらひや
すまひ

衣屋（ころもや）
ぞうりのはなを綯り

糸くり
おり

白川ノ
石うり
御免

八瀬の黒木売
大原の柴うり

百姓の女房

○女俳諧　此道をまなびなむ女多しといへ
ども。丹州のすて女。近くは其数なるべし
○女右筆　いづれ役所にも筆とる女あり
礼じも。すべて女の文章やはらかに風情よきものゝ
○舞子　ほ[illegible]御殿の御守れ。嶋の千歳和か
乃おこりなり。義経の妾静が母。磯のぜんじか
ど始なり。今の舞妓はその余風之
○機匠衣縫　人皇十五代應神天皇の御代。
唐土より二人の女工をまねく。あやはとりくれはとり
婦をそへ。これよりして綾錦を織て御衣

りはじまり。女工のちからいくばくぞや。今の代を
いろどるも。漣もきよし白川石。矢背や大原
の業まで。薪は花をおりそへて御代の豊
や秋はまさる五穀一粒万倍して。百姓は女
まで内裏納るにかけざる。これぞ

上巻の軸

[illegible]